



保育の中の物語(3)

ペンギンものがたり

偶然の積み重ねから

岸井慶子

三年保育三歳児の保育室で帰りの支度をしていると、「ペンギンだ」と誰かが床に映った黄色と水色のペンギンの影を見つけた。近くにいた数人の子どもたちが床のペンギンを手で捕まえる。するとペンギンは、子どもの手の甲に乗る(映る)。角度によっては、捕まえた瞬間に自分や友達影の中に消えてしまう。保育者が窓ガラスに並べて貼ったペンギンのシールが、午後の日差しを受けて子どもたちに偶然働きかけたのだ。

ほとんどの子どもは先生の周りに集まって話を聞いたり歌をうたったり始めるが、ペンギンに夢中のその子たちはそんなことなど全く気にかけない。あの子は、床に足を伸ばし靴先をじっと見る。自分が履いている白い上履きの甲



にちようどよくペンギンが乗る（映る）ように足の角度を変えている。靴の上
にうまくペンギンが落ち着くと、うれしそうに眺め、それでもまた靴先を動か
し、ペンギンがなぜ靴と一緒に動かないのか確かめるようなしぐさをする。こ
んなささいな、けれども楽しい経験を通して、光と影の関係をいつの間にか学
んでいくのだろうか。

もう一人は、窓ガラスに貼られたペンギンのシールにいち早く気づき、じつ
と窓ガラスを見て、「あれあれ」と指さして周囲に伝える。しかし周囲の子ど
もたちは、それぞれの見つけた楽しみを追うことで夢中になって耳を傾けない。
気づいたその子もそれ以上知らせようとはしない。ここが三歳らしいところだ
なあと思う。

一人の女兒がかぶっていた自分の帽子を取り、床のペンギンの上にかぶせ
た。ペンギンを捕まえたつもりなのだろう。隣の男児が帽子に触ろうとする
と、「ダメ」というように強く相手の手を払う。女兒は帽子の上から軽くトン
トンとたたき「ここに入っているのよ。私の捕まえたペンギンが」とでも言い
たげだ。

隣の男児は、何度も女兒の帽子を動かしてペンギンを見ようとする。女兒は
帽子のへりを両手で押さえるようにして、まるで中にいるペンギンが逃げない



ようにしているようだ。

その後、女兒もそつと帽子の縁に顔を寄せ、中をのぞき込むようにする。実は帽子の外側にペンギンは映っているのだが、帽子がたまたま紺色のフェルト地であるために気づかない。気づかないまま、帽子の中にペンギンを捕まえたと思っている子どもが、かわいらしい。この時、帽子が白い生地であつたら、帽子の中にペンギンが閉じ込められているなどという楽しい想像はすぐに消えてしまつただろう。

幼児期の教育は、このように偶然の積み重なりの中に大切な経験が埋め込まれていることが多い。子ども自身も気づかないうちに、ただ楽しいから惹きつけられ没頭しているだけだ。この埋め込まれた経験をより確かなもの、よりみんなのものにしていくことが肝要と考える。

二人のやりとりを反対側（ペンギンが見える角度）から見ていたもう一人の男児が、「ここにありよ」と帽子の外側のペンギンを指でさし示す。しかし、ペンギンが帽子の中に閉じ込められていると思つている二人は、なかなかその指摘の意味がわからない。

その後、ふと相手の指摘に気づいたのか、女兒は帽子の反対側をのぞき込んだ。上から覆いかぶさるようにしてのぞき込んだために、自分の頭の影で帽子



の上のペンギンを見ることはできなかった。

さらにもう一人が、窓ガラスから差し込む光を窓・ペンギンシール・床のペンギン像の三点を結ぶ線上に座り、空中の光を捕まえようとするしぐさをしている。窓の向こうの太陽から光が一直線に進んできていることを、感覚的につかんでいるのではないかと思えるようだ。

このような子どもの一連の姿に、遊びを通して体験から学ぶことの特質の一つが表れているように思う。子どもは遊びや生活の中で、それぞれ多様な、しかし物事の性質や働きその他に関する原初的な発見や気づきをする。しかしそれは、きまぐれで微かで、そのままにしておいては消えてしまう。時には誤ったままの体験的知識となることもあるだろう。ここに、体験から学ぶ危うさがある。

一方、それぞれの幼児が「今の自分の」興味関心に応じて、自分を取り巻く世界について学んでいくからこそ（体系的に整理はされていないが）活き活きとした、心に残る学びとなる。幼児期の学びの重要な特質の一つだ。危うさに配慮しつつ、その時どきに子どもが世界と出会うチャンスをとらえ、幼児の活き活きとした学び方を失わないようにするのは保育者の仕事だ。幼児教育者の力量が問われる。

（鎌倉女子大学短期大学部）